

新設された高齢者通所介護施設のコーナー配置と使われ方
— 高齢者通所介護施設の平面構成とコーナー配置 その4—

通所介護施設 空間構成 コーナー配置
使われ方

- 正会員 ○塩見 和か*
- 正会員 三島 幸子**
- 正会員 中園 真人***
- 正会員 田 甜*
- 正会員 孔 相権****
- 正会員 山本 幸子*****

1. はじめに

その 2、3 では新設された高齢者通所介護施設において施設の平面型と面積規模及び利用者の中心の居場所である主室のコーナー配置の関係性を整理し、その特徴を明らかにした。本報では、使われ方調査結果を基に活動場面の分析を行い、コーナー配置と使われ方の関係性を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

主室におけるコーナー配置の特徴により分類した 6 つのタイプ^{注1)}から FTL+S 一室タイプより施設 B、FL 一室タイプより施設 J、FL 複室タイプより施設 R を抽出し、コーナー配置と使われ方より空間の利用特性を分析し、その特徴を明らかにする。各施設の一日の生活プログラム^{注2)}はほぼ同じ流れであるため、特徴がみられる活動場面として、送迎(迎え)、自由時間、昼食、午睡、機能訓練を抽出した。

調査は活動場面の記録調査を行った。5 分間隔で利用者及び職員の施設内での行動観察を行い、行為の内容と場面を平面図に記録するとともに、写真撮影を行った。調査時期は 2010 年 5 月から 2016 年 9 月である。

3. 主室のコーナー配置と使われ方

3.1 施設 B

施設 B の平面図及びコーナー配置を図 1 に示す。主室に畳空間を有す小規模施設であり、FTL+S 一室タイプの最も多くみられるコーナー配置である。FTL コーナーには円卓が配置されている。また、主室に隣接して事務コーナーを有す^{注3)}。

施設の活動場面を図 2 に示す。来所後 FTL コーナーへ移動するが、午睡コーナーで洗濯物を畳む手伝いをする利用者も見られた。畳空間は 400mm の小上がりで椅子として適した高さであるため、簡易テーブルを置くことで簡単な作業が可能である。9 時半ごろに FTL コーナーで体操を行うが、空間が狭いためその場で可能な上半身を使った体操のみ行われている。自由時間では利用者は FTL コーナーで過ごす。車椅子利用者 1 名は畳傍のリクラ

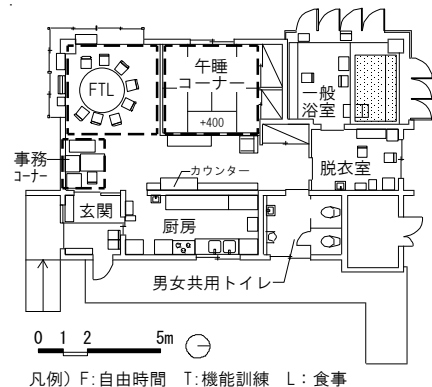


図 1 施設 B の平面図兼コーナー配置図

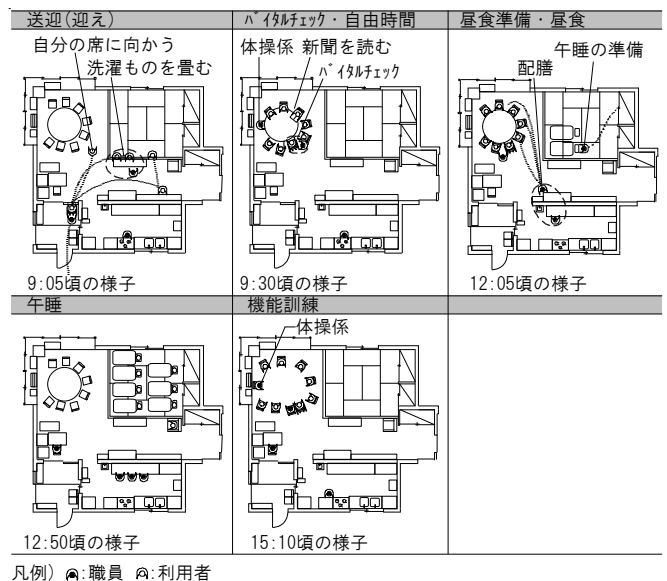


図 2 施設 B の利用者の居場所と行為

イニングソファに移動している。空間が狭いためソファの設置は一台のみであるが、常に同じ体勢でいることが辛い利用者には有効的である。職員は事務や FTL コーナーで見守りを行うが、事務コーナーは主室に隣接するため主室の利用者の見守りがしやすい利点がある。一方、FTL コーナーが狭いため、利用者着座時の椅子背面通路の確保が困難である。昼食も FTL コーナーで行われるため、利用者が着座状態での配膳作業が要求される。厨房には

Corner type and space usage of newly established day care facility for the elderly
The planning construction and corner type of day care facility for the elderly (part 4)

SHIOMI Nodoka, MISHIMA Sachiko, NAKAZONO Mahito, DEN Ten, KOH Shoken, YAMAMOTO Sachiko

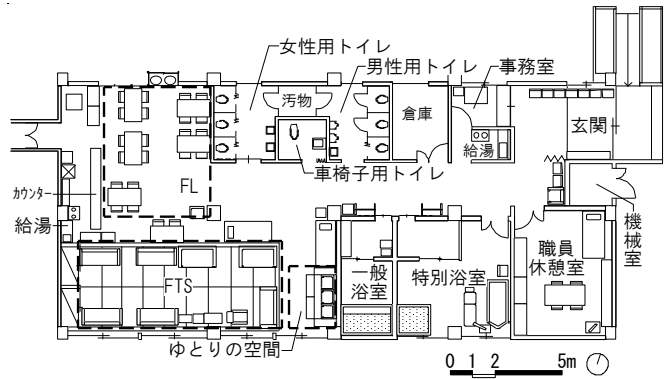
カウンターがあり、料理の受渡しは容易である。午睡は午睡コーナーで行うが、専用のコーナーを設けることで職員が昼食中に準備を済ませることができ、円滑な場面転換が行える。ただし、段差が障害となり這って移動する利用者や職員に抱えられ移動する場面もあった。また、午睡コーナーにはカーテンがあるため、独立した居室と同様な空間となる。機能訓練は FTL コーナーで行うが、午睡コーナーがあるため午睡を続ける利用者も見られた。空間が狭いため、体操など広さを必要とする場合、円卓を片づけて空間を確保している。しかし、午睡以外の利用者の居場所が同じであるため、家具移動の間に待ち時間が発生する。

以上より、FTL コーナーは利用者の1日の居場所として機能している。午睡コーナーの設置により、利用者は静的な空間で午睡を取ることが可能であり、機能訓練等の他のプログラムでも独立した休養場所を確保することが可能である。また、昼食後の午睡への円滑な場面転換も可能であることから、午睡コーナーは有効であると考えられる。一方、午睡コーナーが主室の半分近くを占めるため、FTL コーナーが狭く、利用者着座時は椅子背面通路の確保が難しく、プログラム内容により机などの家具移動が必要である。家具移動により広い空間の確保は可能だが、職員の負担は大きい。そのため、特に小規模施設では複数の活動を同一空間で行うことが多いため、予め活動場面の展開を想定して空間を確保することが重要だと考えられる。

3.2 施設 J

施設 J は軽費養護老人ホームに併設した施設であり、平面図及びコーナー配置を図 3 に示す。中規模施設には珍しく主室に畳を設けた FL 1 室タイプであり、機能訓練と食事の空間を分けているが、機能訓練と午睡は同一空間で行う FL+FTS のコーナー配置である。FL コーナーには四人掛けのテーブル 5 台が並列に並べられている。1 テーブルに椅子が 4 脚そろって無いテーブルがあるが、車椅子の利用者は車椅子に座ったまま利用するためである。テーブルと椅子が並び、畳の FTS コーナーには周りを囲うようにソファが配置され、120 mm の小上がりである。また、主室に隣接して事務スペースとしての機能をもつカウンターが設置されている点は特徴である。

施設の活動場面を図 4 に示す。来所後、FL コーナーでバイタルチェックを受け、大半の利用者は FTS コーナーへ移動するが、FL コーナーで過ごす利用者も観察された。また、ゆとりの空間に移動し温熱機に当たる利用者やマッサージチェアを使う利用者も確認され、自由時間における居場所は選択可能であり、ソファや畳の上で休養する利用者もみられた。職員は FL コーナーやカウンターで見守りを行うが、カウンターでは部屋全体が見渡せるた



凡例) F:自由時間 T:機能訓練 L:食事 S:午睡

図 3 施設 J の平面図兼コーナー配置図

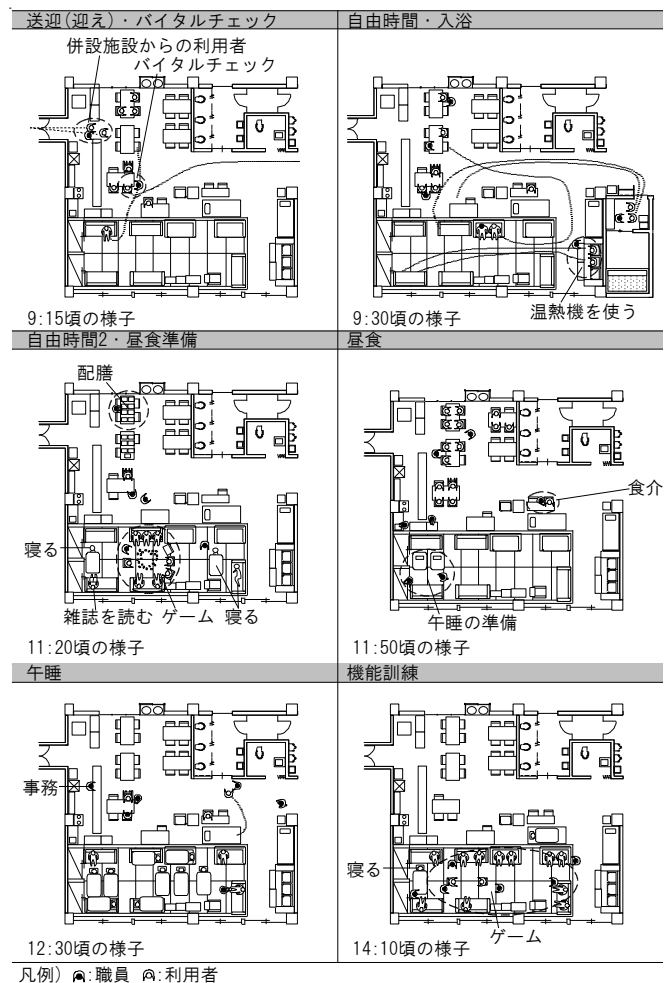


図 4 施設 J の利用者の居場所と行為

め、事務作業を行いながら見守りをする場面も見られた。昼食前に FTS コーナーでゲームが行われるが、全員参加ではなく端のソファや畳で休養する利用者もいた。その間に他の職員は FL コーナーやカウンターで昼食準備を行っている。また、昼食は併設施設で作られたものがワゴンで運ばれるため、準備は汁物の盛り付けと配膳のみである。昼食は FL コーナーで行われるため、利用者の移動のみであり場面転換が円滑に行われている。午睡は FTS

コーナーで行われるため、施設 B と同様に昼食時に職員が布団の準備を行うことで、午睡への場面転換が円滑に行われていた。機能訓練も FTS コーナーで行われるため、布団の片づけが必要であるが、ソファが利用者の逃げの空間として機能しているため、利用者の邪魔にならずに行えていた。機能訓練は空間が広いので、広い空間を必要とするゲートボールや体操も行うことができている。また、その間に職員がカウンターでおやつ準備を行うことで待ち時間なくプログラムの移行ができている。

以上より、FL、FTS コーナーと 2 つの広いコーナーを設置し、プログラムによりコーナーを使い分けることで、自由時間、昼食、午睡の場面転換を円滑に行うことが可能である。また、午睡と機能訓練はどちらも FTS コーナーが使用されるが、ソファを利用者の逃げの場として活用することで円滑な場面転換を行うことが可能となっている。ただし、機能訓練と午睡が同じ空間で行われるため、午睡を続けたい利用者は機能訓練が行われる横で午睡をすることとなり、休養スペースを独立して確保できていない点は課題であると考えられる。また、事務スペースとして使用されるカウンターは主室を見渡すことができるため、職員は事務作業と利用者の見守りを同時に行うことが可能であり、その他にも昼食やおやつ準備及び配膳など様々な作業に使われ、有効であると考えられる。

3.3 施設 R

施設 R の平面図及びコーナー配置を図 5 に示す。生活支援ハウスに併設した大規模施設であり、FL 複室タイプである。コーナー配置は FL+T+S で施設 J と同様に機能訓練と食事の空間を分けているが、さらに機能訓練と午睡を機能分化させている点で異なっている。また、機械を使ったりハビリが可能なトレーニングコーナーも設置している。FL コーナーには四人掛けテーブルを 6 台設置しており施設 J と同様に車椅子利用者は車椅子のまま席に着くため椅子が 4 脚揃っていないテーブルもある。その奥に午睡コーナーがあり、ベッドが 7 台設置されており、パーティションを使って他のコーナーや隣接するベッドで午睡する利用者からの視線を遮っている。

施設の活動場面を図 6 に示す。通所介護専用室は 2 階にあるため、利用者はエレベーターを使用する。利用者は来所後 FL コーナーでバイタルチェック後、自由時間も過ごす利用者が多いが、機能訓練コーナーやトレーニングコーナーに移動する利用者もみられた。機能訓練コーナーでは円卓を囲み職員や他の利用者との会話を楽しむ場面がみられた。トレーニングコーナーには筋力トレーニング器具が置かれており、利用者 1 名につき職員 1 名が見守りを行っていた。昼食時間が近づくと利用者は FL コーナーの自分の席に移動する。昼食は 1 階で作られ、ワゴンに乗せリフトで 2 階に運ばれるため、準備は汁物、

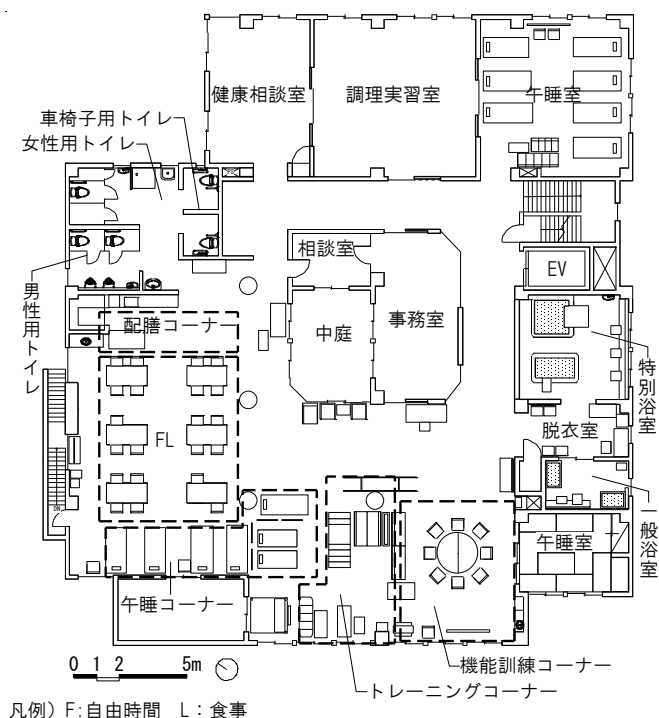


図 5 施設 R の平面図兼コーナー配置図

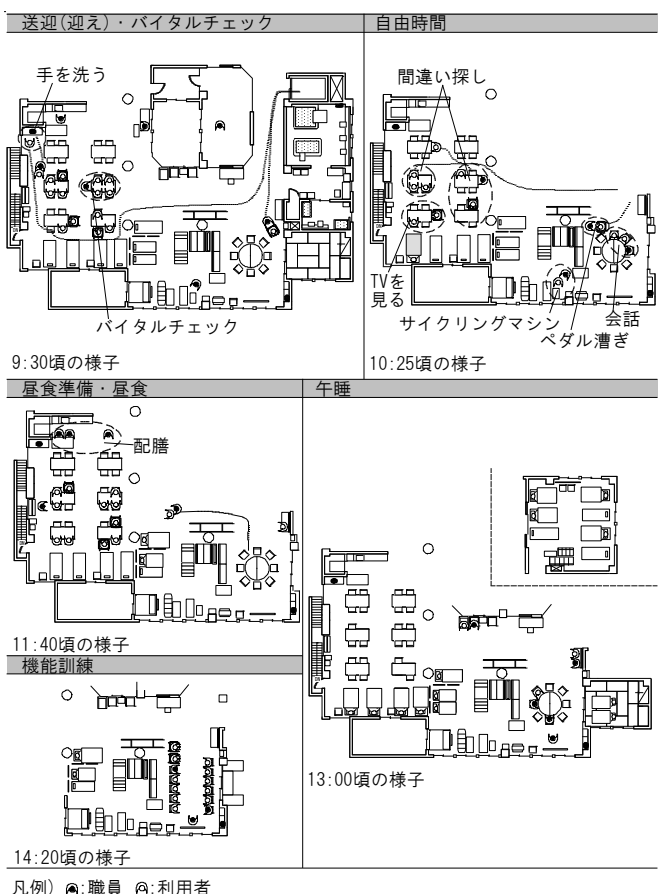


図 6 施設 R の利用者の居場所と行為

ご飯の盛り付けと配膳のみであり、配膳コーナーで行われている。午睡は畳とフローリングの分離室 2 部屋と主室内の午睡コーナーの 3 ヶ所で行われ、大半の利用者は

午睡をとる。午睡コーナーにはパーティションが設けられ、独立した空間を確保している。午睡を希望しない利用者は機能訓練コーナーで職員と会話をしたり、マッサージチェアでくつろいでいた。機能訓練は機能訓練室コーナーで行われるが、職員は利用者が午睡を取る間に家具移動を行い、機能訓練の準備を行うことが可能なため、午睡から機能訓練への場面転換が円滑である。また、空間が広いと、広い空間を必要とする体を使った簡単なゲームなども行うことが可能である。

以上より、主室は L 字型の広い空間を有し、対象施設の中で最も多いコーナー数をもつ。プログラムに応じてコーナーを使い分けることにより、自由時間、昼食、午睡、機能訓練全ての場面転換を円滑に行うことが可能である。また、機能訓練コーナーも自由時間に活用することで、利用者は居場所の選択が可能であり、各利用者の個別対応も可能である。分離室 2 室ともに午睡室として使用されているが、午睡希望者が多く主室に午睡コーナーができており、パーティションを用いてプライバシーの確保を試みている。その他にも回廊型の廊下には中庭に面してソファが置かれるなど多数のコーナーを確保することにより、利用者の過ごし方の選択肢を広げている。

4. まとめ

得られた知見は以下の通りである。

- 1) コーナー配置の基準となる FTL+S 一室タイプでは、FTL コーナーは利用者の 1 日の居場所として機能し、午睡コーナーの設置により、機能訓練等の他のプログラム時でも独立した休養場所の確保が可能となり、また、昼食後の午睡への円滑な場面転換も可能であるため、午睡コーナーは有効である。
- 2) FL 一室タイプでは FL コーナーと FTS コーナーの 2 つの広いコーナーを設置することで、プログラムによりコーナーを使い分けることが可能となり、自由時間、昼食、午睡の場面転換が円滑に行える。FTS コーナーで午睡と機能訓練を行うが、利用者の逃げの場としてソファを活用することで円滑な場面転換が可能となった。ただし、午睡を続けたい利用者は機能訓練が行われる横で午睡をすることとなり、休養スペースを独立して確保できていない点は課題である。
- 3) プログラムの転換を考慮した空間の機能分化及びコーナー設定は円滑な場面展開において有効である。特に午睡は生活プログラムの中で最も静的であり、動的プログラムと同一空間で共存させるのは難しい。よって午睡の機能分化の優先順位は高いと考えられるが、他

プログラムによる弊害の無い分離室に設けるのが無難である。主室に午睡コーナー設置する際は動的プログラムの近くは避け、周囲の視線を遮断する等の工夫が必要である。

以上、プログラムの転換を考慮した空間の機能分化及びコーナー設定は円滑な場面転換において有効であると考えられる。特に午睡は生活プログラムの中で最も静的であり、動的プログラムと同一空間で共存させるのはそのため、午睡の機能分化の優先順位は高いといえる。また、主室に午睡コーナー設置する際は動的プログラムの近くは避け、周囲の視線を遮断する等の工夫が必要である。また、空間の確保が難しく、プログラムが重複する場合はソファなどの利用者の逃げの場を確保することにより、プログラムを円滑に行える可能性も示唆された。

注釈

- 1) 6 つのタイプは自由時間、機能訓練、食事を同一空間で行う FTL 系列より FTL+S 一室タイプ、FTS+S 複室タイプ、FTL タイプ、食事と機能訓練の空間を分けた FL 系列より FL 一室タイプ、FL 複室タイプ、その他のタイプである。
- 2) 生活プログラムは、送迎（迎え）、バイタルチェック、自由時間、入浴、昼食、午睡・自由時間、機能訓練、おやつ、送迎（送り）で構成される。
- 3) 小規模である施設 B は設立時期が古く、設立時に事務室の設置が無く、余室も無いと主室内に事務作業を行うコーナーがある。

参考文献

- 1) 伊藤朱子他 4 名：デイルームにおける家具配置の変化とその要因について、日本建築学会計画系論文集、第 78 巻第 686 号、pp. 775-782, 2013. 04

* 山口大学大学院創成科学研究科 博士前期課程

** 山口大学大学院創成科学研究科 助教・博士（工学）

*** 山口大学大学院創成科学研究科 教授・工博

**** 山口大学大学院創成科学研究科 講師・博士（工学）

***** 筑波大学システム情報系 准教授・博士（工学）

* Graduate Student, Graduate School of Sciences and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ.

** Assistant Prof., Graduate School of Sciences and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ., Dr. Eng.

*** Prof., Graduate School of Sciences and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ., Dr. Eng.

**** Lecturer, Graduate School of Sciences and Tec. for Innovation, Yamaguchi Univ.

***** Associate Prof., Faculty of Eng., Info. and Systems, University of Tsukuba., Dr. Eng.